

選考委員コメント一覧

饗庭伸委員長（東京都立大学）

本年度で29回目を迎えた助成事業は、コロナ禍の影響で、応募の停滞が予想されていましたが、結果的に応募団体の数、質ともに例年とほぼ変わりませんでした。市民社会の持つ「しぶとさ、柔軟さ」を大いに実感し、また選考委員会の側も力づけられたところです。そして、例年と同様に「これだけの素晴らしい活動をしている団体を落選させていいのだろうか」と悩みながら審査をいたしました。

提案については、昨年や一昨年と比べてもその多様性が増したように思います。選考委員会においても満場一致で選ばれたものは少なく、「全員の視点が一致」ではなく「いくつかの人の視点が一致」した活動が選ばれたということです。その中から、住まい・まちづくり活動に新たに展望を与える活動が育ってくることを期待したいと思います。なお、一審査員としては、手広く広げていこうという活動ではなく、具体的で切実な必要性をもとに、小さくても手堅く、身の回りの人たちとつながっていこうという活動を高く評価しました。コロナ禍において、身の回りをつなぎあわせることの重要性を、再び実感したからです。

それぞれの団体からの提案内容にも、コロナ禍の影響が多くありました。コロナ禍を新しい活動のきっかけにしたり、それを巧みに乗り越えようとするものもありましたが、現在進行形の現象であり、その行方がどうなるのかは誰にもわかりません。当初の計画に過度にしばられることなく、柔軟に活動を展開していただければと考えています。

選考された団体は、いずれも重要な課題に取り組むものばかりです。大きな成果を期待したいと思います。

黒瀬武史委員（九州大学）

コロナ禍で身近な生活空間や自分が暮らす地域の価値と課題を改めて考えさせられました。住まいの改善やコミュニティを育む活動が実践しづらい状況もあったと思いますが、今年度も多くの地域から力強い提案をいただきました。近年、社会課題の解決に取り組む提案も増えていますが、地域や支援が必要な方々の具体的なニーズに根ざした活動を高く評価しました。活動の持続に社会的な意義がある提案を拝見することも多く、単年度の助成の難しさも感じますが、本助成が助成終了後もみなさまの持続的な活動を支える礎となることを期待しています。

竹沢えり子委員（銀座街づくり会議）

どれも素晴らしい活動内容と感じました。全国でこれだけ多くの皆さんが、地域・コミュニティのために、独自のコンテンツによる組織を自ら立ち上げ、活動していることに、改めて敬意を表したいと思います。それぞれが地域の個性を生かした活動である一方、時代をうつすような普遍的な課題があるのだということも痛感させられました。

選考にあたっては、自分たちの特性や持っている技術、専門性に止まらず、地域でのネットワークづくり、外部専門家、行政などとの連携が構築されているかどうか、一つのテーマが軸となって、そこから広がりを感じさせるかどうか、などを重視しました。この助成によって、それぞれの活動がますます活発になると同時に、長く持続し継承されていくことを望みます。

原田陽子委員（福井大学）

住まい活動助成の選考を担当しましたが、地域・コミュニティ活動助成に比べて応募件数が少なく、活動内容についてもレベルアップが必要であると感じました。

こうした中で私が評価する上で重視したことは、①建物改修などハード整備のみを主な活動とするのではなく、創造的な機能や企画が含まれていること、②地域の様々な主体との連携による地域に開かれた活動が期待できること、③将来的に助成金がなくても活動の継続・発展が期待できること、④活動内容に独自性・先進性を持ちつつ、他地区への波及効果が期待できることの4点です。

いずれにしても、「住まい」を周辺地域と連続した住環境として捉え、日常的な住環境や生活の本質的改善に繋がる多様な申請内容が今後多数出てくることを期待したいです。

樋野公宏委員（東京大学）

コロナ禍の影響でしょうか、今年度は住まい活動助成への応募が少なかったのが残念でした。人と人が直接会うことが憚られる今だからこそ、「縁」「コミュニティ」「繋がり」「連携」といったキーワードを含む活動がひとときわ輝いて見えました。

選考にあたっては、他地域の参考になる先導的な活動であること、一定の普遍性があり社会への波及効果が期待できる活動であることを重視しました。助成が決定した団体におかれましては、こうした点で優れた成果が得られるよう意識して、活動を進めていただきたいと思います。

残念ながら選に漏れたなかにも、素晴らしい提案がありました。次回募集時期の状況は予測できませんが、いわゆる「ウィズコロナ／アフターコロナ」の時代にふさわしいユニークな活動を期待します。

渡邊義孝委員（風組・渡邊設計室）

いずれの団体も、ユニークで地域に根ざした、そして大切な役割を担っておられることでしょう。私自身も、空き家再生や古民家の修復といった活動に携わる立場ゆえ、申請者の皆さんの強い思いとアピールの一つひとつに心が動かされました。こんな素敵なプロジェクトがあるのか、自分も参加したい、と思うものがいくつもありました。

でもそんな中で、最後に選抜の決め手となったのは、今でなければもう二度とできなくなるという「切実さ」と、身の丈に合った資金計画と文章から滲む団体の「誠実さ」でありま

した。その成果は形のあるものだけではなく、コミュニティという無形の器を永く豊かにしてくれるはずです。その果実を、やがて私も見に行きたいと願っています。

松本昭委員（ハウジングアンドコミュニティ財団）

今年度も、コロナ禍で社会活動が制約される中、全体で 126 件という多くのご応募を頂き、誠にありがとうございました。ただ、住まい活動助成については、地域コミュニティ活動助成と比べて応募件数は少ない状況でした。

人口減少や高齢化を背景に「互助」「共助」の劣化・衰退が指摘される中、住民主体、地元密着で取り組む素朴ながら誠実な活動の応募が多数ありました。また、近年の特色としては、お金のやり取りを含むコミュニティビジネス型の非営利活動も増えています。

そんな中、「活動の明快さ」、「計画性&具体性」、「地域への愛着と哲学（ポリシー）」を有しているもの、そして、「助成金の使途が活動の持続性や発展に寄与するもの」を優先して選考しました。また、大学の研究室や専門家組織による応募については、地域との連携や調整が十分行われ、地域住民との協働・共創の活動であるか否かで判断しました。

財団としましては、新年度も本活動助成事業に関するセミナーや相談会等を開催する予定です。生憎、選に漏れた団体におかれましても、ぜひ来年度再チャレンジをして頂ければ幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。